

科学技術の潮流

JST 研究開発戦略センター

⑧

情報基盤の弱さ

新型コロナウイルス感染症は、健康医療だけでなく、社会的にも大きな問題である。早期の終息を願うばかりだが、専門家にとっても初めての経験だから、理屈通りにはいかない。さまざまな情報を集めて戦略的に考えなければならぬ。

第5期科学技術基本計画は、ソサエティ5・0をうたった。しかし保健所による感染者の集計は、いまだにファクスと電話による。これに対し、厚生労働省はHERO-SYSというシステムを立

上げた。ところが煩雑な入力と個人情報保護が壁となつて、まだうまく動いていない。感染対策は難しい。保健所はクラスター感の把握に努め、きめ細かく対応する。しかしクラスター以外の経路の分からない感染者は半数に及ぶ。すでに

ち上げた。ところが煩雑な入力と個人情報保護が壁となつて、まだうまく動いていない。感染対策は難しい。保健所はクラスター感の把握に努め、きめ細かく対応する。しかしクラスター以外の経路の分からない感染者は半数に及ぶ。すでに

失われた30年

流行は終わるはずという理論で対応している。情報が、法則性が分からな

い。情報が、法則性が分からな

い。情報が、法則性が分からな

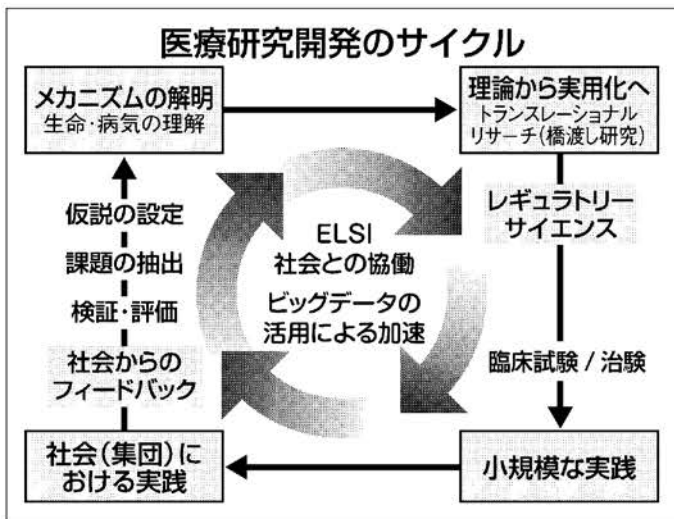
い。情報が、法則性が分からな

データ駆動でコロナ克服



科学技術振興機構(JST)研究開発戦略センター 永井 良三
首席フェロー(ライフサイエンス・臨床医学ユニット)

自治医科大学学長。専門は内科学・循環器学。心臓血管病やがんの分子生物学と薬剤開発、臨床疫学、電子カルテ統合、症例報告の構築など、の研究を進める。博士(医学、東京大学)。



「仮説駆動」である。これを知らなければ、研究開発は頓挫する。治療法の有効性や他との違いを示すのに、情報が必要である。しかし人間は個人差が大きい。ウイルスに感染しても8割の人は自然に治癒する。薬が一見効いたように見えても、自然に治つたのかもしれない。有効性の解析や機械学習は、規制や倫理については、背景のそろつたグループの間で比較しなければならない。そのためにはデータの集め方や分析の仕方、最初からよく考へておかなければならぬ。コロナ禍を経験してみると、データ志向の遅れが、「失われた30年」の原因だつたことに気がつかされる。(金曜日に掲載)